

(対話的な学び(教科は決めず))

「探究し、協同し、創造し続ける子ども」を育成する学びの構想

大阪市立東三国小学校 研究部

1. 研究主題設定の理由

今の時代にかかわらず、常に世界は「不確かな未来」に向けて、よりよい未来を志向しながら、society3.0（工業）から society4.0（情報社会）の時代を歩んできた。そして、AIの台頭など、今の世の中は科学技術が日増しに進歩し、より未来への見通しが持ちにくく、社会構造も急速に変化が進むことが予想される、society5.0の時代へと進んできている。その society5.0の世界では、内閣府の『統合イノベーション戦略 2020』（令和2（2020）年）で「サイバー空間とリアル空間の融合によって持続的かつ強靱な「人間中心の社会」を創り上げるとともに、科学技術とそれがもたらすイノベーションの力によって、我々が直面する難局や迫りくる社会的課題を乗り越え成長につなげ、誰一人も取り残されないように、新たな形で人々がつながっていく、そのような社会を創造する活動である」としている。その中で、これから先の未来を生きる子どもたちにとって、必要な力とはどのような資質・能力なのだろうか。また、どのような心をもったヒトになってほしいと願うのか。

本校ではその資質・能力を「探究」「協同」「創造」する力と想定し、「探究し、協同し、創造し続ける子ども」を、一人残らず子どもの学びの権利を実現し、「聴き合い、学び合う空間」のもとで育成していこうと実践・研究を進めている。そして、相互に支え合う、誰一人として取り残さない「温かい心」をもった、情操豊かなヒトになるよう育んでいきたいと考えた。

2. 研究の趣旨

本校ではこれからの未来を生きる子どもたちに必要な資質・能力として以下の3つの力を想定している。

探究力	対象に対して、内省的・協同的に問いを生み出し、学び続ける力
協同力	他者と関わりながら、協同して対象について思考を広げたり深めたり、実践したりする力
創造力	よりよい未来に向かって思考したり、表現したり、実践したりする力

これら3つの力を育てると同時に、豊かな情操を育んでいくために、「聴き合い、学び合う空間づくり」を進め、子どもたちがより主体的・対話的に響き合う中で、深い学びに向かっていくことができるよう、研究を進めてきた。

3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

視点① 場の設定の工夫

発達段階や学習する単元、また各授業に適した形をとり、「聴き合い、学び合う風土」のもとで、一人残らず学ぶ権利を保障するようにする。グループは男女混合で組むように、

多様な思いや考えが混じり合い、より思考が広がったり深まったりするように、学級の様子や学習内容に合った形で、柔軟に組み合わせていくようにする。「聴き合い、学び合う空間」の醸成がすべての土台である。しかし、これらはあくまで「形」であり、子どもたち同士の関係性を強めていくことを念頭に置いておく必要がある。

視点② 「ジャンプ」のある課題設定による「聴き合い、学び合う風土」の醸成

ヴィゴツキーによる「発達の最近接領域」と「内化」の理論に基づき、「＜背伸び＞と＜ジャンプ＞」のある課題を設定するようにする。これにより、対話の必然性が生まれ、「分からないこと」を認め合い、創造的対話を通して子どもたちの関係は共に「聴き合い、学び合う関係」となり、誰一人として取り残さない温かな心を育みながら、「探究し、協同し、創造し続ける子ども」を育成し、学力の形成にもつながるものとする。しかしこれは、学力の基礎を基礎から順番に上に積み上げていく教育を批判するものではない。ただしこの場合、子どもたちの間では、一方的に「教え教えられる関係」が定着してしまう可能性が高いものと考えられる。

視点③ 「聴き合い、学び合う」関係性

(1) 「分からないこと」を認め合う対話

子どもたちが互いに「分からないこと」を共有し、聴き合い、学び合う空間をつくり上げていく。一方的に分かる子どもが「教える」という関係ではなく、互いの理解度を聴き合い、認め合い、周りの友だちと支え合いながら活動することで、より多くの学びが生まれるものと考えられる。

(2) より広く、より深く、より遠くへ向かう対話

世界は1つの見方・考え方、主義で動いているわけではない。その置かれた状況によって、見方・考え方を使い分けている場合もある。その中で自他にどのような考え方をもっており、今どの考え方を使っているのかを捉え、その考え方を互いに認め合いながらコミュニケーションをとっていくことが大切である。ペアやグループでこのようなコミュニケーションを通して対話的に学ぶことで、より広く、より深く、より遠くへ学びが向かっていくものと考えられる。

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- 子どもたちの学ぶ姿から、「聴き合い、学び合う授業・空間づくり」が進んできていることが見とれた。
- 教員の意識が、「教師の手立て中心（方法）」ではなく、「子どもの学ぶ姿中心」に変容してきており、その子どもたちの姿から授業・空間づくりを検証し、授業改善につなげようとする態度が見られるようになった。

(2) 今後の課題

- いかに継続して「子ども中心」に諸教育活動や授業・空間づくりを進める土壌を維持できるか。
- 「子どもの学ぶ姿」から授業・空間づくりを検証し、授業や空間づくりの改善につなげていくために、「学びの伴走者」として各教科や教育活動全般の専門性をどう高めていき、子どもたちがよりよく育つ環境を整えていくか。